

ネイチャーおおさかのDNAをひも解く第2弾 インタビュー報告

文

藤本 陽子
武内 亜矢
具志堅 葉子



写真-1 第一分科会

5月31日に開催された「ネイチャーおおさかミーティング」では、3つの分科会に分かれ5人の方に協会設立初期のお話をうかがいました。その詳細をお伝えします。

①自然観察会について

(自然観察インストラクター養成講座：富川 薫、後藤 裕己)

報告：藤本 陽子

富川さんは、四日市公害訴訟の原告として公害問題を研究されていた経済学者の宮本憲一氏との出会いがきっかけで保全協会理事となった。講座の実務担当として白羽の矢が当たり、運営兼受講生として参加した。講座設立の背景として、バブル期の自然保護運動では自然を愛する人は多いがそれを守るために働く人が少なく、危機がやってきてはじめて動き出し後手しか打てていないという状況があった。また、協会内での各活動グループの自立性確立が課題であったことから、人材育成のための講座が切望されていた。

後藤さんは当時日本野鳥の会の大阪支部に所属しており、協会内の里山調査の手伝いをしていたことが縁で受講生として参加したことが始まりで現在もスタッフとして講座運営を担っている。そうして集まった1990年度の1期受講生は講

師側でもおかしくないほどに豊富な人材で、修了生の連絡会である「そよごの会」をフォローアップのため自発的に発起された。当初は秋始まり半年間の講座だったが、第9回(1999年)からは、充実した内容にしたいとの意向から4月開講8ヵ月間の講座となり今年度は33期生を迎えている。

お話を伺い、改めて自主自立して活動する人材を輩出する講座を継続させてくださった1期生の大切な想いをしっかり受講生へ伝えていかなければいけないと感じました。

②市民調査活動について

(タンポポ調査：木村 進、里山一斉調査：常俊 容子)

報告：武内 亜矢

木村さん：公害が激化して環境問題への注目が高まった1974年。保全協会の前身の「自然を返せ！関西市民連合」では、身近な自然に関心を持ってもらうため、タンポポを指標とした環境調査を実施した。大学生主体で調査や発表を行い、木村さんもタンポポ調査を卒



写真-2 第二分科会



写真-3 第三分科会

論のテーマにした。当初、参加者は少数だったが、マスコミが取り上げたことで大きな反響が。継続して参加する人もおり、今も多くの人がサンプルを送ってくれることに喜びを感じる。市民調査活動は、市民が身近な自然に関心を持つ手段。調査の集約は、それだけの市民が環境に関心を持った結果といえる。

常俊さん:里山一斉調査は、当時増え始めたシカをきっかけに、身近な里山の自然を知るという目的で実施された。北摂で始まり、ダム反対運動支援のために大阪南部のコースも加えていった。もともと山が好きだった常俊さんは、1991年にナチュラリスト入門講座を受講、一斉調査にもスタッフとして加わった。現在は、効果的な広報や情報共有、スタッフ・リーダーの世代交代が課題である。市民への啓発、そして各グループの活動紹介という役割ももつ里山一斉調査。新しい参加者が増え、今後も継続してほしい。

木村さんは「調査のたびに新しい発見がある」、常俊さんは「フィールドはいつも楽しい!」と語りました。市民の力、そして「自然が好き」という気持ちが市民調査活動の原動力なのだと実感しました。

③里山維持管理活動について

(五月山グリーンエコー:中川勝弘)

報告:具志堅葉子

中川さんは、若い頃から「自然好き」。阪神大震災で被災して、実家の池田に戻った時、裏山の美しさに気づき始めたその頃、保全協会里山委員会が、日本財団の助成プロジェクト「市民と行政の協働による里山維持管理活動」のモデル地区に五月山が選ばれて発足した活動に参加。初めて行った草刈り後の気持ちよさにハマったのがきっかけで今に至る。

里山委員会は1996年当時、里山の理念や概念を熱く議論を交わし、その維持管理の大切さを説いて回った拡大期で、下の世代の中川さんは先輩方のその熱量に少し引き気味だったそう。それでも事務を引き受け、毎回里山委員会のサポートを受けながら、30~40人で、ササ刈りを中心に地元の五月山の保全活動に取り組む。

2000年に助成が終わり、池田市職員と地元市民が二人三脚で独り立ち、地道に頑張ってきた。里山維持管理には技術や体力が必要で、参加者への安全配慮にも責任が問われ、有望な若者の参加や企業との連携もあったが、結局引き継

いでくれる人は出てこなかった。20年余り子ども里山体験活動「里山あそび隊」も続けてきて、市内の子にはお馴染みの行事となった。今は“交流”を大切に、さまざまな団体とも連携しながら活動を続けている。

信念を曲げず、丁寧に地道に「続けていくこと」を大切にして、周りの理解にも感謝している。自然体験のない子ども達が増えており、これからも「自然のリアル」を感じられる場を創っていきたいとのこと。話をお聞きし、たった1人の想いが自然を守り支えていること、出会いの重要性を改めて実感しました。

残念ながらビジョン委員会での賛同を得られないため、DNAをひも解きビジョンへの道筋を考えていくワークショップはこれにて終了となります。今後も互いに「価値観」「想い」を語り合う場をさまざまな場面でしていただければ幸いです。インタビューに応じていただいた方々、参加いただいたみなさま、ご協力ありがとうございました。

この記事に関するお問い合わせは下記へ

vision@n-osaka.jp